

委員向け事前アンケートの集計結果

第1回委員会を迎えるにあたり、委員の皆様が子どもの権利や立川市の子ども・若者をめぐる状況、条例に期待すること、委員会で話し合いたいテーマ等について、どのように考えているかを事前に伺いました。

本資料は、回答を個別に評価するものではなく、委員間で共通している問題意識や、今後さらに議論する必要がある論点を整理し、議論の出発点の一部となることを目的としています。

回答の違いは「意見が対立している」ということではなく、条例を考えるうえで大切な視点の違いとして捉えます。

<条例案策定に向けた作業の進め方や要望>

委員会の検討事項等について事前の情報提供があると、議論の内容や方向性を想定できる
会議体で話し合うにあたって、急に振られて話すことを苦手とする人もいる
呼称は〇〇さん、又は△△委員、カジュアルな服装での参加OK、座席は自由、その日に座りたい席に座る（グループワークなどでグループ分けをする場合は別）、全ての委員が参加しやすい、話しやすいような配慮ある進行をしてほしい
アンケート等委員からの提出物などは提出期限に余裕を持って取り組めるようにしてほしい

<日頃関わっていること、日頃関わっている関連団体や現場>

通常、恒常的あるいは一時的に社会的養護の必要な子どもや、過去に社会的養護を経験した方々への関与を中心に、里親養育に関係する子どもたち。また、小中高の学校関係者、町会、民生児童委員、保護司、青少年健全育成関連団体、社会福祉法人ネットワークにおける関係団体等と関わっている
中学校で教育活動、地域の方々との交流も少なくない
電話で子どもの声を聴きその気持ちに寄り添うチャイルドラインの活動、子どもの権利を体感するワークショップの実施等、保育士として幼稚園型こども園で勤務（2歳児プレクラスと早朝及び教育時間以降の在園児預かり保育担当）
定時制高校、通信制高校におけるキャリアサポート、居場所づくり。子ども・若者の居場所づくり。若者の就労支援（ジョブトレ）。生活困窮者世帯の中学生の学習支援。ひきこもり・不登校などの子どもを持つ保護者支援。立川市子ども・若者自立支援ネットワークの事務局。
大学生による中高生の部活動での外部コーチ

<ご所属や子どもに関する活動の中で、子どもの最善の利益の実現にとって課題となっていること>

養育者の不適切な関り（過干渉や虐待等）による権利の侵害、成長機会の逸失
特に障害等の特別なニーズを持つ子どもたちの教育環境や養育環境の格差
過剰なインターネット等を通じての情報に翻弄される状況（親も子どもも）
青少年の自殺問題
教師や関係機関を含め、大人が一方向的に決めてしまう場が多い
子どもの自己肯定感が低い
生きづらさを感じている子どもが多い
発達面で課題のある子どもが年々増える一方、その手あてやサポートをするしくみ、人材、小児科医、療育施設等が充分でない
「生きる」ことにつながる自分の身体や命を大切にする性教育ができていない。包括的性教育を幼い時から年齢に応じて繰り返し行う必要がある
広報の弱さ

<立川の子どもたちに問われていること>

A 領域別	
家庭のなかで	子育てにおける親の不安、長時間ワンオペの育児、現実を問わずにスマホアプリの言いなり育児
	スマートフォンの普及により家族の会話が少なくなっていることが課題
	家庭という社会の中で守られる・育てられるだけでなく意思をもって様々な活動に関わる主体性
	子どもが十分に話を聴いてもらえているか
	家庭が居心地のいい場所であるか
	子どもにとって家庭が安心できる場であるために、子どもだけでなく家族全体をどのように支えていくか
	核家族化したことによる心理的孤独感
学校内外のなかで (不登校の子どもも含めて)	障害等の特別なニーズを持った子どもたちの居場所不足は深刻な状況、教育機会の格差、特に登下校に大きな負担が生じている
	大人の価値観を押し付ける場が多い
	困りごとがあるときに頼れる相手や場所や仕組みの周知を含めた充実
	先生に話を聴いてもらえているか
	自分の気持ちや意見を友だちや先生に伝えられているか
	居心地が良いと思える場所が少ない
	子ども・若者が地域の中で「ポジティブな経験」を得られる環境をどう作るか 特に、立川駅周辺には20校以上の通信制高校があり、小中学校時代に不登校を経験した子ども・若者が多摩地域全域から集まっている。こうした子ども・若者を地域の中でどのように支え、彼らにとってポジティブな経験を作っていくのかは、立川市における重要な課題であると考えている
	親の所得による SNS 機器やゲーム機などの所有状況の違いから、周囲との格差を感じたり、劣等感を抱いたりすること
地域のなかで	従来型の「地域」の機能や形から、子ども中心の地域へとリモデルのタイミング
	子どもと大人(地域住民等)が関わる場が少ない
	中学生が放課後や土日に過ごす場がないことが課題
	地域での小規模な活動等にも参加しやすくするための低いハードル
	家庭以外に居場所(いてもいい場所、居心地のいい場所)があるか
	子どもの気持ちに寄り添ってくれる第三者のおとながいるか
	外国にルーツを持つ子ども・若者をどのように応援していくか 立川市においても外国人住民は増加しています。将来的に日本で生活していくことを考えている子ども・若者も多く、地域としてどのように支えていくのかが重要な課題だと考えている
	近隣住民同士の交流機会の減少や、地域とのつながりの希薄化により、子どもが地域の大人と関わる機会が減っていること

B 成長過程で	
乳幼児期の子ども	発達に課題のある子どもや日常的に服薬を必要としている子どもの増加
	両親や家族だけでなくその外側の人や社会と接する機会が必要
	子育ては親育ち、親(養育者)が子育てに悩んでいないか
	発達が保障されているか

	保育や子育てにかかる費用が大きく、家庭の経済的負担が大きいこと
児童期・小学生の時期	発達に課題のある子どもや日常的に服薬を必要としている子どもの増加
	体力低下
	困りごとや意見を相談・発表のしやすい制度が必要
	個性や自分の意見が尊重されているか
	遊び場
	どう安心安全な場で地域の様々な大人との接点をつくっていくか 立川市では、学校での不審者による事件などが起き、学校と地域の関係づくりを考え直す必要があるタイミングでもある。そのときに、改めて、学校という安心・安全な場で、子どもたちが地域の大人や自分達より少し年上の先輩と出会えること、そして地域の人たちが学校の先生を応援するような輪が広がっていくことの重要性を確認する必要があると考えている
	子どもが気軽に遊びに行ける場所や、安心して過ごせる居場所が減っていること
青年期・中高校生の時期	家庭以外での居場所（人）の確保、不登校
	相談できるシステムの周知
	自分の夢や思いを実現できる進路が選択できているか
	将来に夢が持てる「今」を生きられているか
	バイトの少なさ
	中高生の居場所をどのようにつくっていくか 市内では、中高生や若者世代が気軽に集まり、安心して過ごすことのできる場所が不足していると感じている。既存の公共施設等を含め、若者にとっての居場所をどのように確保していくかが課題であると考えている
	親や先生には相談しにくい悩みを気軽に相談できる相手や、自分の気持ちを理解してくれる人が少ないこと

<立川市でどのような「子どもの権利」を実現していく必要があるか>

条例ができることによって当事者にとって実際に何らか良き方向への変化を感じられるような内容としていく必要がある
子どもの意見を聞くだけでなく、きちんと反映させることが重要
子どもの権利を大人が主導して守るのではなく、子ども自身が理解し主張していけるようにする必要がある
安心して暮らし、成長していけることはもちろん、自尊感情を持ち、自分の将来を描きながら生きられるようにする
子ども達が遊べる場所などを増やす
誰一人取り残されことなく、すべての子ども・若者の利益や関心が尊重されること
子ども期だけでなく若者期も見据えた、切れ目のない支援体制を構想すること
子ども・若者とともに地域をつくっていくという姿勢と、子ども・若者をリスペクトする姿勢を持つこと
子ども・若者が、自分に関わる事柄の意思決定に参加できること
子どもが年齢や立場の違う人と関わりながら、自分に合った学び方や過ごし方を選択できる権利

<条例ができることで、立川市がどんなまちになってほしいと思うか>

権利主体である「子ども」の成長と幸せを誰もが無条件に大切なこととしてとらえることができ、育み支えていける大人の意識がまとまり、強く 固く柔らかな環境を構成していけるようなまち
--

様々な状態にある子どもが将来に希望を抱き、夢を語り、チャレンジをして、心からの幸せを感じることができるようなまち
子どもにやさしい街
子どもや若者が自分たちの有する権利を知ることから、自分たちの暮らす環境を自ら良くしていくことで新しく暮らしやすい街になってほしい
夢育で・たちかわ子ども21プランの理念「子どもたちの笑顔があふれ、歓声が聞こえるまちに」が実現できること
生まれてきて良かった、こんな自分でもいいんだ、こんな自分が好きだな、このまちが好きだな、ここで暮らしていこう、とおとなも子どもも思えること
皆が過ごしやすい街
子ども・若者をリスペクトし、彼らの利益や関心が尊重されるまち
様々な事情により困難を抱えている子ども・若者の背景を想像し動くことができるまち
子ども・若者が信頼できる大人がいたところにいるまち
学校に通っているかどうかに関わらず、すべての子ども・若者が地域とのつながりや社会参加の機会を得られること
子ども・若者がそれぞれ持っているものを活かして地域に参加し、自分の出番を見出すことができるまち
暇な時間や誰かと話したいと思ったときに、気軽に遊びに行ったり、会いに行ったりできる場所や人が身近にいるまち
学校や家庭だけに居場所を限定せず、地域の中にも安心して過ごせる場所があり、年齢の違う人とも関われるまち

<特に関心のあるテーマ>

子どもの虐待防止に係ること、地域との関わり
部活動の地域連携（中学生の居場所づくり）、不登校支援
子どもの権利教育、いじめ
子どもの意見表明・参加（子どもたちが自分の思いを日常的に表せること、伝えられる機会が増えること）、子どもの相談・権利救済のしくみ（子どもオンブズパーソン制度の実現）、子どもの居場所（自分がいてもいい場所がまちの中に増えること）
子どもの意見表明、子どもの居場所、子育て
若者期への支援、学校に行っていない子どもたちの居場所、少年院や社会的養護なども含めた家庭に様々な事情を抱えている子ども・若者への支援
地域との関わり、若者への支援、広報

<子どもや若者の声を、市や学校、地域に届けるにはどんな工夫が必要か。また、意見を聞くのは具体的にどんな手段が適しているか>

様々な層、様々な状態にある子どもたちから声を拾い上げることが大切なことと思う
子どもの声を聞くということはそれなりの覚悟が求められるかと思う
話すことが得意な子ども、書くことが得意な子ども、複数、一人など、自分の考えを表現する方法が選択できるという
学校に対して頻繁にアンケート依頼を行うことは避けるべき
子ども議会、子ども委員会など、意見聴取の場を特設するのが良い
子どもや若者の声を受け取る側に担当する人や仕事を整備して受け取る体制を整えることが必要
現代の若者には意見を聞く手段としてフォームのようなデジタル上のアンケート形式のものが手軽なので適している
子どもの本音を聴くことは簡単なことではない。日々の活動や生活のなかで子どもの声に耳を傾け、拾うことが大切
「雑談の中に真実有り」子どもの集まる場所に出向いてヒアリングや、こども（年代別に）とおとなの「しゃべり場」など開催が良いのでは
チラシとかを作る
フリーダイヤルとかよりも、学校でカウンセラーさんとか話しやすい人を見つけて話すのが1番
「聴き取り」だけでなく、声を届けていくプロジェクトを、子ども・若者とともに進めていくこと

そのプロジェクトに子ども・若者が経験の専門家として、自分の持っているものを活かして参加できること
集めた意見を学校だけで終わらせず、市や地域に届ける仕組みをつくる
意見を聞くだけでなく、「その意見がどう反映されたのか」を子どもに伝える

<その他、条例の内容に関して、ご意見>

他市の先行例を参考にして策定できると効率的か
先行例において、策定した「条例」がどのように扱われていくのか、活かされていくのか、気になるところである
子どもにアンケートばかりを行う取組にならないことを願う
2005 年に策定した子ども総合計画に市民提案重点プロジェクトとして「子どもの権利に関する条例の制定に市民参加のもとで取り組む」と掲げながらも、その思いがカタチにはならなかった 22 年間、その思いを何とかして繋ぎたいと行政と協働しながら様々な施策を実施してやっとここまで来たかという思い 子どもたちの、市民の、思いや願い、夢が詰まった「子どもの権利に関する条例」をつくっていきたい